

日系人の日本社会適応  
- 日本語能力上級留学生の場合 -

和田晃子（国立国語研究所）

## 1. はじめに

出入国管理及び難民認定法が改正されてから、就労目的で来日する日系人が、かなり増加してきた。日系人は、改正前は一般外国人と同じように入国審査を受けなければならなかったのだが、現在は3年の期限こそあるが、「日本人の配偶者」か「定住者」資格で在留が可能になったのである。南米出身の中では、特にブラジル・ペルーからの出身者数が顕著である。ブラジルの場合、他の南米の国々に比べ、日本在住・ブラジル在住の日系人数も群を抜いて多いため、必然的に注目や関心も集めることになり、既にブラジル国内や日本国内での調査もされている。山中(1993)の、群馬県大泉町などの日本国内のブラジル人コミュニティのフィールド調査などが、それである。一方、最近では、日系人の滞日年数が長くなるにつれて、就労者自身の日本語教育の問題だけでなく、就労者子弟の日本語教育・母語教育もとりあげられてきている。

他方、1990年に「留学生10万人構想」が発表されてから、受け入れの面などに問題はあるが、留学生の数も増えてきており、多くの調査研究がある（田中, 1990他）。モイヤー（1987）は、日本語をも含んだ日本社会への不適応によるストレスを取り上げ、留学生個々のストレス状況を明確にする5項目を検討している。5項目とは、①ストレスと感じる特定状況を具体的に捉える、②ストレスの構造を明らかにする、③出身国・性別・日本語能力などの要因別に検討する、④他の状況と比較する、⑤様々な状況への体験を検討する、とある。この③のように、いろいろな背景を持つ学習者の急増に伴い、学習者の多様化が認められてはいるが、「日系留学生」という枠のみの研究は、まだまだあまり多く聞かない。日系人とは、祖先を日本人に持つ人々のことであり、多少なりとも日本についての情報を縁者から得て、来日していると考えられる可能性が高い。それゆえ、日系以外の外国人と比較した場合、一般に日本社会への適応は早いとも考えられる。だが、日系人就業者の問題では、逆に日系ゆえの適応困難な点もあると聞く。そこで、本研究では日系をキーワードにして、留学生に焦点を絞り、彼らの日本社会適応と、日本語能力に関係があるのか調べていく。そして、適応できていなければ何が原因になっているのかも探っていく。なお、本研究で使用する単語を以下のように定義して進めていく。「適応」は、通常用いている行動様式を変えずに行動できる、と自分が感じている状態。「習慣」は、通常用いている行動様式そのもの。「社会」は、通常用いている行動様式が通じる地域。「文化」は、習慣や社会を総称したものである。

## 2. 研究方法

本研究では、ライフ・ヒストリー研究の手法で、インタビューによって得られる口述記録を、主に用いることにする。これは、人類学・社会学など他分野ではすでに広く使われている。通常の調査で使われるインタビューとの最大の違いは、語り手と聞き手の自由な会話を元に展開される、ということである。一般のインタビューでは、問答が続き、話題が質問外に触れると、聞き手が軌道修正を行う。もちろん、ライフ・ヒストリー研究でも、聞き手は何らかの意図を持って、ある個人にその人の今までの人生や体験してきたことを話してもらうわけだが、そこでは語り手の語りを阻止しないのである。このような方向付けのないインタビューは、語り手の自発性をもっと促すことになるのである。従って、それぞれの語り手によって、展開が異なることになる。被験者はある問題の解決を知らず知らず自分で行うことになるかもしれないし、聞き手が共同解決者になるかもしれない。とにかく、本人が重要と思っている事柄が、重要と思っている順に出てくることは、通常のインタビューに慣れている研究者の目を開かせてくれることになるのである。また、後に量的調査を行う際、貴重な基礎調査になることも間違いない。

この他には、先行研究の枠組みを使って、語りの裏付けを行う。まず、内海(1990)でも用いられた Acton(1979)の内的社会距離 (PDAQ:The Professed Differential Questionnaire) を使う。Actonは内的社会距離とは、ある学習者の、その対象文化への「態度」によって決まる、つまり自分とある文化との精神的な距離による、としている。Acton以前に、Schumann(1978)も社会距離について述べているが、Actonは、測定が困難な社会距離よりも、学習者自身の精神的な距離の方が行動に影響を与えらるとして、内的社会的距離を取り上げたのである。学習者は一つの質問につき、以下の3つの視点で内的距離を測ることになる。

①自分自身(S:Self)が、その質問項目について、どう思うか

②自分の出身国の人達(C:Country)が、その質問項目に、どう思うかの予想

③対象文化の人達が(A:American)、その質問項目に、どう思うかの予想

なお、本研究では、“American”ではなく、“Japanese”ということになる。それぞれに当てはまる箇所をマークすると、二つの視点の距離が出てくる。例えば、S Cは、自分(Self)と母国(Country)の距離を示し、0に近い程自分は母国民の代表ということになる。S Jは自分と日本人(Japanese)の距離を示し、0に近い程自分と日本人は一体であるということになる。C Jは、母国と日本の距離を示し、0に近い程母国民と日本の国民は似ているということになる。また、質問は20のテーマにそれぞれ二つの形容詞が与えられ、どちらの方が自分の気持ちに近いか、答えてもらうことになっている。テーマは、被験者が自文化と対象文間で比較しやすいものであることが必要条件であるので、本研究での質問項目は、Actonとも内海とも違う。以下に、Actonをも

とに筆者が作成した質問の例を示す。

	父	
S(self)	— : — : — : — : —	
C(Country)	賢い — : — : — : — : —	馬鹿な
J(Japanese)	— : — : — : — : —	
S(self)	— : — : — : — : —	
C(Country)	尊敬されている — : — : — : — : —	尊敬されていない
J(Japanese)	— : — : — : — : —	
	〈テーマ〉 父・宗教・子供・母国・将来・日本・女性 ビジネスマン・政治家・日本人・人間関係 母国語・サッカー・友達・ラテンアメリカ 相撲・母・日本語・家族・日本文化	

次に、横田(1991)の、留学生と日本人学生の親密化を妨げる要因調査の留学生版を参考に、35項目の質問を用意した。質問の項目がどの程度親密化を妨げているかを、「全然思わない」から「強く思う」までの5段階評価で答えてもらう。本調査では各質問は口頭で行い、インタビューの一部として回答を得た。その際、解答にコメントがつけば、妨げずに録音を続けた。

最後に、自分は精神的に母国寄りか日本寄りか、またその位置は移動するかどうか、することがあればその時期と移動の幅についても聞いた。これは、筆者が考案した文化変化尺度で回答を得た。

### 3. 調査

#### 3-1 調査方法

札幌在住の南米出身者の留学生・技術研修生16人に、1回につき30分から2時間程度のインタビューを、2回か3回行った。始めて話を聞いた知人の日系人から知り合いを次々に紹介してもらい、被験者を増やしていった。1回目のインタビューでは、こちらが用意していった質問項目(家族構成・家族の移民史・日本語教育歴・現在の日本での生活など)から多く質問したが、その際会話の流れは被験者に任せ、会話を遮ることはしなかった。2回目以降は、前回のインタビューでの筆者の疑問点の確認や、それらをきっかけにして会話を始めた。

本研究では特に、上級と思われる3人を事例研究として、取り上げることにする。その理由は、まず第一に16人中、日本語がずば抜けてよくできることで会話中わからない言葉の確認がしっかりできること、また、より多くを話してくれる被験者であった、という要因も大きい。さらに、異国籍の3人を比較してみたいという気持ちもあった。

表1 事例研究被験者

被験者	国籍	性別	移民世代	専門	年齢(調査時)
R	アルゼンチン	男	2	交通	27
E	パラグアイ	女	2	農業	28
N	ブラジル	女	3	医学	29

### 3-2 調査結果

口述記録を研究の主資料として使用すると決めた時点で、傾向を導くことは期待していなかったし、サンプル数の少なさもあって、3人の被験者達の語りからは、当然傾向といえるようなものはなかった。ゆえに、話題の中心的な部分を拾いまとめてから、筆者の簡単な解釈を加えていく。会話中のイニシャルR・E・Nはそれぞれの被験者のもので、Wは筆者である。

#### 3-2-1 事例Rの場合

Rはアルゼンチン国籍の日系2世で、首都ブエノスアレス近郊のラ・プラタという約300の日系家族がいる町で、生まれ育った。アルゼンチンの日系人はその約8割が首都の近くに居住している。12歳から警察学校に進み、調査時点では警察を退職しての来日であった。Rの話題は幅広く、以下のような論点が挙げられた。「習慣、日本語、言葉と文化・習慣館の関係、教育、義理、日本語学習、人間関係、自由、日系社会、閉鎖性、意見、要領、表現方法、任意性、余暇、統一化、差別、女性の権利、権利、不正」。Rの日本社会への語りの中心は日本人とのつきあいから生じたものではなく、社会構造そのものの方が多い。繰り返しの多かった話題のうち、まず習慣についてみていく。

#### 語り1

R：日本人というのは日本人社会ってすごく統一化されていますよね。日本人しか住んでませんから。ですから日本的な習慣しかないんですよ。だから違った習慣の人がいると、何か白い目で見られたりして。うちではないんですよ。うちでは大統領からして違いますから。大統領はシリア系の二世です。日本に来て、自分の思っていることがこの人達と違うとって、ムカッとくることもありますけど、でもあとになると、ああ習慣の違いなんだって。

これはアルゼンチンは多民族国家ゆえ、自分と違う人種への配慮は当然であるという国民性のなせるものと思われる。Rの職業が警察ということでも、何か関係がありそうである。また、Rの語りを聞いていると、一見Rの意見と思われる言及が、父親から聞いたことがそのままRの意見になっているように感じる。以下はその例である。

## 語り 2

R：僕がここに来てすごくショックだったのはですね、今年来てですねえ、習慣的にやっぱり違うってことですね。それから思っていること expression しないってこと、それが。

W：それで困ったこともありましたか。

R：ありましたね。ですから僕はそういう勉強するの好きですから自分でも独自の分析みたいなのはしてるんですけど、うーん、日本人がそういう風に社会的に自分の思っていることを出さないようにしているとか、習慣的に頭にたたき込まれていますよね。ですから日本人が爆発した時はすごいんですよ。へへ。ですから僕の親父も言うんですけど、爆発した時はこわいからああいう第二次世界大戦みたいなことが起きるんだって、いうことは、よく言われましたね。（1回目インタビュー）

語り 3 は、豊富なテーマで日本社会を語ってきた終わりに近い箇所である。

## 語り 3

R：まあそれ位かな、僕は。うちの国とあちらの国の差、って言うんですか。うちの国の社会と日本の社会の差って言うのは、そこにあるんじゃないですか。

W：大きいですね。

R：大きいですね。それなりにうちでは自由ですとか、権利ですとか、何とかって言うものがすごく高められています。それなりに問題もありますよ。やっぱり問題が起きて当たり前なんですよ。人間がいっぱい住んでいる所で意見の違う人もいっぱいいますから。でも、自分の思っていることですか、自分が正しいと思っていることを表現する人たちがいる、って言うのが、そこに自由があるんですよ。それで横で聞いている人の判断って言うんですか、あんたのいうこと間違ってるよ、ですとか、いや、あんたの言ってること正しいよ、そういうもの opinion ですから、意見、自分のやってることを聞くこともできるし、行き来がすごく働いてる、うちでは。

W：まだ働いてないですね（日本では）。でもそういう動きは日本でもあるんですけどね。

R：うん、僕もそれはあると思うんですよ。でも一般の社会ではあるかもしれないですけど、それが、支持していく人の中であるかと言ったら、ないです。ですから一般のそういう人と切れてる。（2回目インタビュー）

語り 3 は自由について述べている箇所だが、Rの語りのほとんどは、自由が基本になっている。その自由に溢れているアルゼンチンはすばらしい、とい

う感じで、実際日本人との接触から得たものは少ないように思える。テレビ・ラジオ・新聞などからの知識を元に、日本社会への批判をしているようにも受け取れた。

### 3-2-2 事例Eの場合

Eは、パラグアイ国籍日系2世で、国際協力事業団(JICA)の直轄地であるアルト・パラナ出身である。パラグアイの農林水産省を退職して、国費留学生として来日した。Eは「習慣関係、人間関係、日本語、日系社会、自身の複雑さ、日本語学習、伝統文化・芸能、言葉と文化・習慣の関係、閉鎖性」などについて語ってくれた。パラグアイでは移民の歴史が浅く、1986年で50周年を迎えたばかりである。国際協力事業団(JICA)が1980年に行った日系人子弟の日本語教育調査では、日本語学校の子供達は他の南米の国の子供達に比べて、日常会話や音声にも狂いがなかったと報告している。また実際、前述の直轄地というのは、日本人が団体で移住して、日本語だけで生活できる場所であるため、Eの日本語能力は超級に入るとされる。一方、都市以外に生活する日系人のコミュニティーでは、現在の日本では想像もつかない程の、移民当時の日本の生活や習慣が根強く残っている。Eはこうした古いやり方に反発し家族と衝突して、13歳で家を出て一人で生活していた。

#### 語り4

W：日本語の名前もあるんですか？

E：はい、日本語の名前は久佳っていうんですけど、あの、久しいに佳ですね。でも全然使ってません。

W：あの、どっちが好きとかありますか？

E：そーですね、あの、Eって呼ばれることに、っていうか、すごい、パラグアイでもやはり、日本人の社会っていうのがあって、日本人の社会とパラグアイの社会と両方取ることも可能だと思うんですけど、日本人の社会ってすごい難しいんですよ。っていうのがありますよね。

W：ふーん。

E：だいたい私はどちらを取ったかという、パラグアイの社会を取ったんです。まあ、それもあって、まあEと呼ばれることに全然抵抗はないです。もちろん家に帰るとEとは呼ばれません。

W：呼ばれない？

E：うん。

W：久佳さん？

E：うん、だからそういうちょっと呼び方によって自分の中でどちらの社会に属するかっていうのが自分の意識の中では関係あるような気がする。

(1回目インタビュー)

日系社会を出て、13歳から一人で生活してきたEとしてはパラグアイ人として生きる他なかった。こうした背景が原因で、本人の居場所はいつも中途半端で、自分の立場は複雑であると思っているようだ。早くから独力で生きてきたからこそ、人間とのふれあいを大切にしており、日本での生活にはそれが欠けているために最大の不満へと変化しているのではないかと思う。

## 語り5

E：日本に来て何が一番難しいかというと、人間関係です。それ以外は、サービスにしろ、物価にしろ、日本の物価は高いっていうけど、高くないと思うんですよ。日本で円をもらって、日本のお金をもらって暮らすなら、私の国でお金をもらって暮らすより暮らしやすいんですよ。でも何が一番ネックになるかということ、人間関係です。って言うかね、ほんとにねえ、独立して暮らそうと思うならいいかもしれないですけど、他の人の干渉がなくていいと思いますけどね。やはりね、人間って一人で生きていけるのかなって思いますよね。それを考えると、人間関係がすごい難しい。

W：おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんから、そういうのは聞いてなかったんですか。

E：うーん、あまりないですね。ただね、仕事上日本人との関係の仕事がすごく多かったからそれはありました。ああ、何でこういう考え方するんだろうな、っていう。だから、もう、そういう先入観が働くっていうのもあります。

W：日本のそういう考え方は面倒くさいですか。

E：うーん、面倒くさいって言うよりもねえ、どういうところがって言うかねえ、日本人はどこまで友達なのか、っていうのがわからないんですよ。それと、上と下の関係ですね。上の人にはペコペコするけど、下の人には偉そうにする、っていうところが嫌なんですよ。で、こう同じレベルでつきあいができないって言うか、日本人はシャットしてしまうんです。あなたの入れるのはここまで、って。だからそういうところがうまくいかないって言うか、戸惑いを感じてしまう。(1回目インタビュー)

もちろん日本でも敬語の発達にみられるように、人間関係は重要視されているが、それはEの考える「思ったことをはっきり言ってぶつかりあってこそ、人間関係を良くする」こととはかけ離れていたようである。はっきり言わないことについて、以下紹介する。

## 語り6

W：日本人がダイレクトに物を言わない、っていうのは、いい所と悪い所と両方あると思う。私は思うんですけど、どう思う？

E : 確かにねえ、理論的から考えると、きっと悪い所といい所とあるんだと思いますけど、自分からして言うとな、それはもうダイレクトに言うべきだっていうのがありますよね。

W : めんどくさい？

E : めんどくさいって言うよりもねえ、うーん、なんだろう、めんどくさいより、言うんだったら、ダイレクトに言えばいいじゃないって。正直に言えばいいじゃないかって思いますね、うん。

W : そういう考え方はじゃあパラグアイの日系人社会には、あまりなかった？

E : ないですね、全然。ごちそうになれば、はい、おいしかったですねえ、次の日にお礼なんて全然言わないし、そんな堅っ苦しいことなかった。

W : ない？

E : それにパラグアイだったら招待されてなくてもその日に行って、御飯食べて行け、これは私が作ったんだ、おいしくなくてもおいしいと言え、とか。日本人はそういう所発想が逆ですよ。やはり、粗末な物を出すのはいけないって。だからあまり、招待してなくて、ひょこっと来た時にテーブルに招くってことはほとんどないし、そういう所全然逆ですよ。どちらが好きかって言うと私、パラグアイのそういう所が好きなんですよね。(1回目インタビュー)

語り6では、日本の習慣の欠点のみ挙げているが、E自身自覚していることで身につけている日本の習慣がある。それは男性をたてることで、家庭内でそれが自然に行われていたため、日本でもそのように行動することは少しも気にならないとしている。精神的に中途半端なEの位置を、垣間見れる部分だろう。

### 3-2-3 事例Nの場合

Nの語りは主に「礼儀・言葉と文化を覚えることの関連性」で占められていた。Nの論述には日本社会を受け入れられないという部分は少なく、本人はその理由として、ブラジルでの剣道・日本舞踊の継続、また祖父母からの影響が大きいとしている。幼少時からの、週末毎の祖父母との生活が、日本の伝統的習慣を当たり前のことと思わせ、剣道への傾倒がさらに拍車をかけたようだ。

#### 語り7

N : 私のうちの中では家族4人だったんですけど、日曜日になるとずっとおじいちゃんの所だったんですよ。

W : ふーん。

N : 遊びにって言うか、朝からもう、土曜の朝から行って日曜日に帰ってく



る。ですから、そのわずかな間なんですけれどもいろんなやり方が残ってるんですよ。その祖父母のやり方が、昔のやり方だなんていう。ある程度私も昔のやり方の趣味が合った。

W：ああ、

N：趣味って言うか、合ったかもしれません。憧れていたって感じですよ。だからその方が目につくって言うか。（3回目インタビュー）

ブラジルでの剣道は、正に異文化体験であったと思われるが、Nは剣道における厳しさこそ日本文化であると理解し、それが人格形成にも役割を果たしたと思われる。剣道と日本舞踊の稽古には日本語での教授が不可欠で、また技術だけポルトガル語で伝達することもなかったため、指導そのものが日本社会・日本文化の獲得に通じていたのだろう。

### 語り8

W：ああ、友達にも日系人が多かったことなんですけど、皆さんその文化とか日本の習慣への、どのくらいわかってたと思います？

N：そうですね、私の友達はだいたい同じレベルで

W：それは剣道のお友達？

N：そうです。だから前に言ったと思いますけど、剣道の中でもすごく礼儀が正しいし、厳しいんですよ。だから日本のやり方についていけないと、剣道もできないし、納得もできないって言うか、そういうことなんですよ。（3回目インタビュー）

3人の中ではNだけが日系人以外の現地国籍保持者を「外人」と呼んでいた。これは一般の日系人にはよくあることで、Nも単にその言葉を使っていたに過ぎないのかもしれない。しかしNの中に、日系以外のブラジル人と日系人との間に何らかの垣根があるようにも思えるのである。

### 語り9

W：物をあげるときに「つまらないものですが」と言うのはめんどくさい？

N：いや、そんなことはないです。ほんとの気持ちですからね。

W：ブラジル人の友達にあげるときに同じように言いますか？

N：ええ、言いますよ。「気持ちだけ」の意味で。そのやり方でしちゃいますから、外人も真似するんです。（1回目インタビュー）

物の授受に伴う日本式の習慣をブラジル人にも広めている、というくだりである。この他にも、日本で勉強中なら先生方に敬意を、そして教えてもらっていることへの感謝を忘れずにいなさい、と同期の研修生達に忠告したこと

もあるそうである。

### 3-3 調査の分析

#### 3-3-1 3人の論点から

以上、事例研究での被験者の語りを見てきたが、3人の論点について整理してみると表2のようになる。

表2 被験者3人の論点

論点	R	E	N
習慣	4	5	7
日本語	2	4	4
日本語学習	1	2	3
人間関係	1	5	1
日系社会	1	4	3
自身の複雑さ	0	4	2
伝統文化・芸能	0	2	3
言葉と文化・習慣の関係	2	2	5
躰	0	0	6
教育	2	0	0
自由	2	0	0
義理	2	0	0
意見	2	0	0
閉鎖性	1	1	0
生活への満足	0	0	1
任意性・統一化・余暇	1	0	0
要領・自由・女性の権利			
差別・権利・不正			

表3から、まずRの論点がかなり幅広いことに気づく。また、Eは習慣と人間関係、Nは習慣と躰に強く関心を持っていることがわかる。一方、3人とも、習慣について述べた回数は多いが、内容は完全に違っている。Rはアルゼンチンが多民族国家であるため、習慣の違いはあって当たり前である、との立場を取り、Eは日本独特の人間関係のあり方を筆頭に、日本の習慣に否定的な態度を取っている。逆にNは、長く日本舞踊・剣道を続けてきたせいもあってか、美化しすぎているとも思われるほど、積極的に肯定している。

Rは、父親から日本についてかなりの知識を得てきているようだ。語り2以外でも、父親からの情報が多いことを示唆する言及がある。その情報に偏りがあれば、当然のRの先入観も偏見に満ちたものになるであろう。R自身

が身近な人間関係への不満を多く漏らさないのは、その先入観の中から抜け出せないのではないだろうか。また、論点も非常に多岐に渡っているということは、知識として持っているものはたくさんあるが、実体験に結びつかずいつまでも浅いままになっているのに違いない。

一方、Eは、人間関係への不満が一気に突出した形になった。習慣についての論点も蓋を開ければ、どこかで人間関係につながっている。生活の安定の必要条件として、人間関係の充実を挙げるほどの言及があるということは、あと一步で日本人への不信感へと育っていくかもしれない。

Nは、日本在住の日本人と比べても、優等生の類であろう。「道」への悟りがこんなにも浸透するものかと、頭が下がる思いで語りを聞いた。習慣や躰への言及の端々にそれが現れていたが、かなり特殊な生活スタイルを持っている日系人だと思う。

### 3-3-2 語り以外から

まず、PDAQの結果を述べる。

表3 内的社会距離

	SC	SJ	CJ
R	0.2	1.85	2.0
E	0.85	1.85	1.9
N	0.15	0.48	0.53

SCが0に近ければ、その被験者は母国の一般的な国民の代表である。SJが0に近ければ、日本人と似ている。CJが0に近ければ、母国民と日本人は似ていると思っている、いうことになる。表3からは、RはSCの値が小さく、またSJとCJの値が大きいため、完全に母国寄りであることがわかる。Eは、RよりはSCの数値が大きいが、SJとCJの値が大きく、母国寄りとも言えないが、また日本寄りであるとも言えない。Nの場合は、3つの距離は極めて近く、両国の社会に適應している状態であると言える。

次に、横田(1991)の親密化を妨げる要因調査を元に作成した、質問の結果を述べるが、被験者数があまりに少ないため、因子分析などはせずに、質問への答えと共に付加されるコメントに注目した。しかし単純集計の結果では、筆者が提示した親密化を妨げる各要因を積極的に支持したのはR(93.5)、E(82.5)、N(41)の順であった。RとEは近似値だが、Eの語りには自分の体験が多く含まれており、その体験として得られたコメントが少なくなかった。

最後に、過去から調査時点までの、文化変化について述べる。

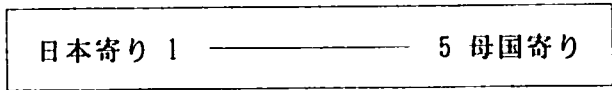


図1 文化変化尺度

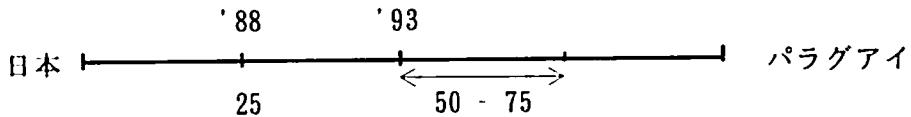
図1のようなスケールを被験者達に示しながら、思い出せる限りの過去から調査時点までの、日本と母国の文化における自分の位置を尋ねたものである。環境や精神の変化は誰にでもあるものであるから、「いつ頃」「(1から5までの)どの位置」で「何をしていた」かについて返答してもらったのが、図2である。

図2 文化間変化

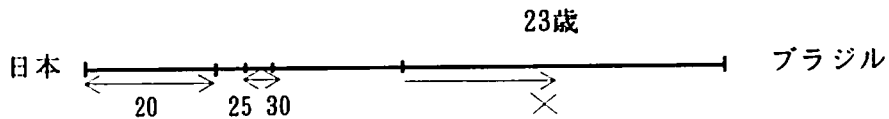
【Rの場合】



【Eの場合】



【Nの場合】



RとNは両端で移動があったが、反対側への動きはなかった。Rは、完全にアルゼンチン側までには到達しない。移民のすべてに当てはまることだが、日系人に限らず、自分は日本人を祖先に持つことにより、100%のアルゼンチン人になることはありえないと言う。しかし、自分の子供には半分の所を見せて、自分で選ばせるつもりであると言っていた。Nは「あまりにも自分が日本人の方だから」と、一度ブラジル人側へ移動しようと試みたことがある。しかし「ついていけませんよ。なんででしょう！っていう位にね」と、失敗した。今では、中間地点に留まることも難しいとも言っている。また、完全に日本側に行ったらブラジルに住めなくなるので、日本寄りの2割位を残してさまよっていく。この2割を越えてしまうと、日本人側に到達するのにもういくらも距離がない、と言っている。一方、この二人に比べて、Eは幅広い変化があったということになる。これは、日本人としての生活をやめて、パラグ

アイ人の社会で生きることを決めた時に大きく動いたようである。もしパラグアイの日系人社会がもう少し開かれたものであったなら、彼女を踏みとどまらせ、そこまでする必要もなかったかもしれない。88年までは、仕事の関係で日系人とのつきあいがほとんどであったらしい。現時点で、完全なパラグアイ側は理解できるが自分には行けない、と自覚もある。調査時点では、パラグアイ側の50から75%位を動きながら、パラグアイの社会で生きていき、かつ日系人ともうまくやっていくことを望んでいた。

以上、語られた内容から、被験者達の日本社会への適応がどのようなものが把握した後、その状況を語り以外からも見てきた。結果、ここまでで述べてきたように、Rのように日本社会構造そのものへの強い感情を語る場合、Eのように生活環境での人間関係を語る場合、そしてNのように適応が順調な様子を語る場合、それらがP D A Q・親密化要因・文化間変化によっても裏付けられたのである。南米日系人というキーワードだけでも、様々な背景の違いから、個人として大きな差異を抱えているわけである。結果は目新しいものではないが、筆者にとって改めて配慮の必要性を喚起された。

#### 4. 考察

筆者には、日系人であれば、家庭内での日本語学習の進度に合わせて、ある程度日本の習慣や文化を学ぶであろうという、無知ゆえの先入観があった。さらに、日本語能力上級者であれば、日本語への壁も低いので、日本社会への適応が進みやすいとさえ思っていた。しかし、言語学習の過程に文化理解の機会が含まれるとは限らないのである。つまり、被験者の日本語能力について調べる場合、語学力にのみ注目するのは片手落ちなのであり、どのようにしてその能力を身に付けたかにも注目するべきなのである。移民の場合、親が日本との心的距離を短く感じる程に子供は感じないのは当然のことであるが、例え古いやり方であっても民族固有の考え方や習慣を伝えていかないと、子供はさらに日本から離れていく。その結果、来日する機会に恵まれても、顔は日本人で言葉もわかるが考え方が変わっている、と言われる日系人が誕生することになる。このような成りゆきは、極めて自然なことであるのだが、迎える日本人の側に、もう少し様々な背景を持つ彼らへの理解があれば、彼らにとって日本語学習への新たな動機付けにもなって、より日本社会への理解が進むに違いない。個人によって大きな違いがあることは今回の調査でもわかったが、日系人が日本語をどのように捉えているか参考になるので、国際交流基金の『海外の日本語教育の現状(pp. 59)』に載っている、中南米の日本語教育の実情を引用する。

中南米では、「日本語学習によって日本の文化・芸術・歴史を知る」  
「ほとんどが日系人子弟」であり、ルーツを知ることや日本の文化を理解

するのに役立つこと、また親の態度・考え方を理解するのに役立つ」

「日系人社会の日本語と文化、習慣を2・3・4世に継承させる」「家庭内で日本語で言葉の交換ができるようにする」など、継承語としての日本語教育の役割を挙げている機関が多かった。

既に言われていることだが、日系人の日本語教育は、決して国語教育ではない。例えば、中南米のある国のコロニアの日本人学校では、依然として日本の国語教科書が使われているが、果たして賢明策であるかどうかはわからない。移民先の国情で、日本語教育が全面的に認められてきた国ではそれは効果があるかもしれない。しかし、それができなかった国では、外国語教育と割り切って進めるしか方法がない。ゆえに、日系人だから、と一括りにして結論を急ぐようなことは許されないのである。

前にも軽く触れたが、3人が母国や母国の人を指すときにRが「うち」、Eが「パラグアイ人」、Nが「外人」と呼び方に差があることは、国籍の差ではなく、母国をどう捉えているのかにもよるのでは、とも思う。そしてこれが、逆に日本社会への理解の深さとそれを実行している度合にも関係してくると、言えよう。

今回の事例3人だけでは、日本語能力と日本社会への適応に関する、とは言えないし、もとより一般化するつもりもない。敢えてインタビューを中心とした形の研究を進めたのは、問題点の存在だけに留意するのではなく、留学生の一人一人をもっと深く知ることが必要であると思ったからである。実際には物理的に困難な面も多いが、それを経た上で、量的調査と言われる統計データとこのような質的調査を組み合わせれば、多様化する日本語学習者への一端でもつかむことができよう。菅野(1991, pp. 25)は、口述記録による生活史資料の長所の一つを「文化変化の微視的な研究に役立つ」としているが、それを日本語教育で扱えないはずはない。今回は日本語能力上級者に限ったが、今後も他のレベル、また他の国籍の日系人についても、調べていくつもりである。

#### 【参考文献】

- 内海由美子(1990)「日本語学習者の文化適応に関する一考察」筑波大学地域研究研究科修士論文
- 国際協力事業団移住海外事業部(1980)「中南米及びカナダ移住者子弟の日本語教育調査報告書」
- 国際交流基金日本語教育センター(1993)『海外の日本語教育の現状 - 日本語教育機関調査・1993 -』
- 菅谷よし子(1991)「ライフコース研究と生活史法」『宮城学院女子大学研究論文集』73号 宮城女子大学文化学会 pp. 19-42

- 裴岩ナオミ(1987)「「海外成長日本人」の適応における内部葛藤－ライフ・ヒストリーによる研究から－」『異文化間教育』1号 アカデミア出版会
- モイヤ－康子(1987)「心理ストレスの要因と対処の仕方－在日留学生の場合－」『異文化間教』1号 アカデミア出版会 pp.81-97
- 田中共子その他(1990)「在日外国人留学生の適応に関する研究(1)－異文化適応尺度の因子構造の検討－」『広島大学総合科学部紀要Ⅲ』第14巻 pp.77-94
- 山中正剛(1993)「地域国際化と在住外国人のコミュニケーション実態」『コミュニケーション紀要』第7輯 成城大学大学院文学研究科 pp.127-157
- 横田雅弘(1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5号 アカデミア出版会 pp.81-97
- Acton, William R. (1979) "Perception of Lexical Connotation: Professed Attitude and Socio-cultural Distance in Second Language Learning." Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- John H. Shumann (1976) "Social distance as a factor in second language aquisition", University of California at Los Angeles, pp.135 - 143